

ティム・バートン、ジョニー・デップタッグ作の共通性

英語英文学科2年 山崎あい

はじめに

ティム・バートン監督と俳優ジョニー・デップのタッグ作は毎回注目を集め、人々を魅了する。一番記憶に新しいのは『Alice in wonder land』(2010)である。これは、ティム・バートン初の3D映画だったが初めてとは思えない世界観の作り方で普通で見るとは断然3Dが良いという定評も得た。他にもティム・バートンとジョニー・デップのタッグ作は『シザーハズ』(1990)、『エド・ウッド』(1994)、『スリーピー・ホロウ』(1999)、『ティム・バートンのコープスライド』(2005)、『チャーリーとチョコレート工場』(2005)、『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』(2008)などがある。このように多くの作品を世に送り出しているのならば、何か共通性があるはずである。こ

の2人だからこそ表現できる世界観が。そして、そんな作品を作り上げたのはいかなる人物なのか。ではまず、ティム・バートンとジョニー・デップそれぞれの経歴を述べてみよう。

ティム・バートン

ティム・バートン (Tim Burton 本名: Timothy William Burton 1958.8.25-) は、カリフォルニア州バーバークに生まれ、幼少時は周囲から「変わった子供」だと言われ、10代の頃からホラーや怪獣映画に強く惹きつけられると同時に、友人らとストップモーション・アニメを自主製作したり、廃棄物汚染防止ポスターのデザインで表彰されたりと、早くもクリエイティブな才能を開花させていた。1976年、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・

ジ・アーツ入学し、アニメーター養成教育を受ける。3年間で籍した後、デイズニー・スタジオにアニメーターとして採用された。しかし、彼にはデイズニーに対する苦手意識があり、1984年に彼はスタジオを退社した。

そんな時、ワーナー・ブラザーズが、ティム・

バートンに長編デビュー作をオファーした。その後、ジャーナリスト出身の女性プロデューサー、デニズ・デイ・ノーヴィと制作会社「バートン・プロダクション」を創設し、彼の活動は活発化した。彼は現在イギリスのロンドン在住で、アメリカの映画監督、映画プロデューサー、脚本家、芸術家として活躍している。ゴシック、ホラー、ファンタジーなどを基調とした独特の映像センスとキャラクター造形が特徴で、特にB級ホラー映画・カルト映画等を好む。

ジョニー・デップ

ジョニー・デップ (Johnny Depp 本名: John Christopher Depp II 1963.6.9) はアメリカ、ケンタッキー州オーウエンズボロで生まれ、父親はジョン、母はベティ・スーとの間に生まれ、6歳の時にフロリダ州ミラマーに移りそこで育つ。少年時代から音楽好きで、高校時代に「キッズ」というロック・バンドを結成し、83年にロサンゼルスでデビューした。それからまもなくバンドは解散し、友人のニコラス・ケイジから俳優になるよう勧められる。84年「エルム街の悪夢」のオーディションに合格し、映画デビュー。86年「プラトーン」に出演して、テレビ・シリーズの「21 JUMP STREET」で爆発的な人気を得る。90年にジョン・ウオターズ監督の「クライ・ベイビー」で映画初主演して、ティム・バートン監督の「シザーハンズ」では、人造人間でありながら人間以上に人間らしい、哀しみと愛をたたえたエドワード役をこなし、不思議な感動を与えゴールデングローブ賞最優秀主演男優賞にノミネートされる。93年の「妹の恋人」でもゴールデングローブ賞最優秀主演男優賞にノミネートされ、若手の実力派俳優としての地位を確立する。94年「エド・ウ

ッド」で再びティム・バートン監督と組み、またしてもゴールデングローブ賞にノミネートされるが受賞は叶わなかった。97年には監督にも挑戦し、自ら脚本・主演も務めた「ブレイブ」は第50回カンヌ国際映画祭に正式出品され、高く評価された。このように、奇抜で魅惑あふれるティム・バートンと数々の賞を総なめしている名俳優ジョニー・デップの最強タッグが手を組んだ作品を実際に、初期、中期、最近の3つをあげて見てみよう。

『シザーハンズ』

シザーハンズは、ティム・バートンとジョニー・デップの初のタッグ作であるが、もうこの時点で2人の世界観は出来上がっているように思える。とある孤独な発明家の手によって生み出された人造人間のエドワード。しかし発明家はエドワードが未完成のまま他界してしまっただ。そのため、エドワードは両手がハサミという奇妙な姿で一人人里離れた屋敷に取り残されてしまった。そんなある日、エドワードの屋敷に化粧品の訪問販売をしているペグが訪れ、彼女は彼を家に連れて帰ることにする。エドワードは植木を綺麗に整えたり、ペットの毛や人の髪の毛を切る才能があり、周囲の人々からも評

判になった。また、彼はペグの娘であるキムに恋心を抱きはじめる。しかし人間社会の辛く悲しい現実が彼を苦しめ、最終的には元の屋敷に戻ることになる。全体的にブラックでありながらどこことなく新鮮な何とも言えない感じ。まず目につくのは何といってもジョニー・デップ演ずる主人公がハサミの人造人間エドワードである。見た目からすればほぼホラーに近いがこれは列記としたラブストーリーである。それも叶わぬ切ないラブストーリー。エドワードは、人間誰しもが一度は経験する人を愛する喜び、愛される喜び、悲しみ、怒り、愛情、孤独をとっても短い期間に体験し、最終的に孤独を選択する。彼の場合は、絶頂期からの転落の振り幅が大きいので余計に観客に感動を誘う。

『ティム・バートンのコープスブライド』

これは、2人初のアニメタッグ作。ティム・バートンのアニメ作といえば、Disneyの『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』だが、世界観は同じである。ブラックの中にあるラブストーリー。主人公は、金持ちだがバツとしない魚屋の一人息子であるヴァン・ドート夫妻の一人息子、声をジョニー・デップが演じるヴィクター。ヴィクターは両親の目論みにより貧乏だが

貴族であるエバークロット家の娘ヴィクトリアと結婚することになる。はじめはこの結婚に不安を抱いていた両者だったが、リハーサル前に初対面した二人はお互いに何か運命的なものを感じ始める。しかし、リハーサル中ヴィクトリアは誓いの言葉の長さに苦戦し、神父は彼に式までに確実に覚えてこなければ結婚を解消すると告げた。焦ったヴィクターは夜、森の中で木を

ヴィクトリアに見立て練習を始めた。そして最後にはその木の枝に指輪をはめ誓いの言葉を完璧に言うようにまで上達した。しかし、その木だと思っていたものは死んだ花嫁（コープスブライド）であった。こうしてコープスブライド（名はエミリー）を娶ったヴィクターは死者の世界に引きずり込まれてしまう。はじめはヴィクトリアと結婚するため必死に地上の世界に戻ろうとするヴィクターだが、次第に彼はエミリーにも惹かれるようになり、彼女との結婚（死ぬこと）を決意する。だが生前に悲劇的な恋を経験したエミリーは、愛するヴィクターの本当の幸せは何かを考え、自ら身を引き、ヴィクトリアと彼を引き合わせる。こちらは最終的には結ばれるわけだが、これは第二の主役であるコープス・ブライドのエミリーが前作のエドワードのような境遇にある。叶わぬ恋、喜び、悲し

み、裏切られた怒り（憎しみ）、愛情、そして孤独を味わう。そして、彼女は最終的に愛する人の幸せを考え自ら昇天する。

『チャーリーとチョコレート工場』

ジョニー・デップ扮するウィリー・ウォンカは、世界一とも称されるお菓子工場の工場長。しかし、その工場内は秘密に満ち溢れている。そんなある日、ウォンカは「生産するチョコレートの中に5枚だけ金色のチケットを同封し、それを引き当てた子供は家族を一人同伴で工場を見学する権利が与えられ、さらにそのうちの一人には想像を絶する素晴らしい副賞がつく」という告知を世界中に向けて行った。そんな中運よくチケットを手にしたのは食いしん坊の肥満少年オーガスタス、お金持ちでわがままな少女ベルーカ、いつもガムを噛んで野心家少女バイオレット、テレビ好きで反抗的な少年マイク、そして家は貧しいが家族思いの心優しい主人公の少年チャーリーであった。彼らはウォンカの招待のもと、工場の中で現実ではありえない夢のような不思議な体験をする。しかし、その道中次々と子供たちがハプニングに巻き込まれ一人、また一人と消えていく。そして最後に残ったのはチャーリーであった。この作品は主に『シ

ザーハンズ』のエドワードのような奇妙なキャラクター、ウィリー・ウォンカがまず目につくだろう。とにかく見た目からして怪しげで、何かを内に秘めているかのような人物。見た目だけでストーリーを思い浮かべてしまう存在。彼もまた喜び、悲しみ、怒り、愛情、孤独を経験する。しかし、この作品は前の2作とは違うのは、主人公が最終的に孤独を選択しないということ。一度はチャーリーに次期工場長を断られ孤独にはなるものの、最後にはチャーリーの家族とともに工場で暮らすことになる。

共通点

この3つをあげて見えてきた共通点としては、1つ目は主人公の見た目が飛びぬけて奇抜であるということ。2つ目は主人公が劇中に喜び、悲しみ、怒り、愛情、孤独を経験するということが挙げられそうである。私がかここで意外に感じたことは、どんな見た目をしていようと主人公は一度は誰かに愛されているということ。それは女性だったり、家族だったり様々だが、前にも述べたように、彼らが人間誰しもが共感しえる感情というものに直面することによって彼らは最終的に私たちに感動を与えてくれる。よって、彼らは私たちにも愛される存在へ

と変わる。また、ティム・バートンは作中で本当の悪役というキャラクターを出さない。悪役らしい悪役は出てくるが、本当に酷くて許しがたい悪役は出てこない。出てくるのは、人間の汚い部分。それを引き出しているティム・バートンもちろん素晴らしいが、何よりすごいのはそのキャラクターを演じることが出来るジョニー・デップである。どんなに奇抜な見た目の気味の悪いキャラクターであつても、ジョニー・デップが演じればそこにジョニー・デップさが必ず出る。そこを計算してティム・バートンは友人関係もあるだろうが主人公にジョニー・デップを起用しているのではないかと思う。よってこれらの作品は、この2人だからこそ作り上げることが出来た作品なのである。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%A0%E3%83%BB%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%B3>

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~jidaï2005/STAR-SI/MAN/S-JOHNNY-DEPP.html>